

## 秋田病理組織細胞診研究センター

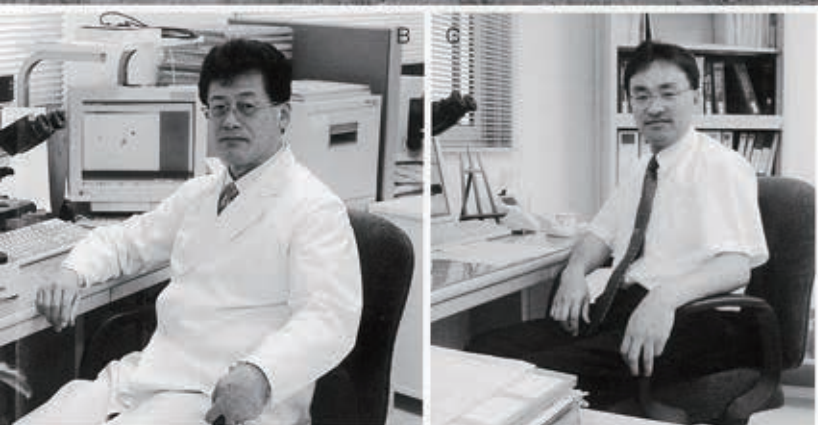
—地域に根ざし、患者中心の医療を支えるセンターを目指して

由利本荘市は秋田県の南西部に位置し、南に秀峰鳥海山、東に出羽丘陵を望み、中央を子吉川が貫流して日本海に注ぐ。秋田市から 30 km 程度、秋田県内一の面積を誇る都市であり、海岸部と山間部では気候が違うほど多彩な地形を有している。

秋田病理組織細胞診研究センター（阿部一之助社長：臨床検査技師、細胞検査士）は 2003 年 3 月、「患者中心の医療！その一員として」をテーマに、地域に根ざした病理・細胞診断施設を目指し、秋田県第 23 号の登録衛生検査所として発足した。



A



B

当センターの前景（写真 A）、業務量とスタッフの増加によりそれまでの事業所が手狭になったことから、現在の地に本年 4 月に新設された。

お話をうかがった阿部一之助社長（写真 B）と南條 博医師（写真 C）。「地域の患者さんのため」という信念を軸に、迅速で正確な診断結果を提供するよう努力されている。

### 迅速・正確な病理診断を目指す

現在秋田県内では 15~16 名の病理医が病理診断に携わっている。ところが、県内の多くの病院には病理医が不在であり、必然的に病理診断は外部の機関へ委託せざるをえない。当センターが設立されるまで、それらの病理検査の大多数は大手センターへの外注となっており、仙台や東京の検査センターで診断されている状況だった。

地域に根ざした病理診断が提供できる施設を、と考えた阿部社長は、秋田大学の増田弘毅教授の賛同と協力を得て当センターを 4 年前に設立。病理組織学的検査、細胞診検査、特殊染色標本作製、免疫組織化学標本作製を受託項目として、迅速で正確な病理・細胞診検査を目指している。設立当初は営業 1 名、臨床検査技師 3 名（うち細胞検査士 1 名）のスタッフにより、25 坪の施設で、3 病院、5 開業医と契約して事業を始めた。4 年目を迎えた現在では取引施設数も 120 を数え、1 日の平均的な検体数も病理検査 40~50 検体、細胞診 70~100 検体と、年を追うごとに右肩上がりの増加を示してき



た、増える検体数に対応するためにスタッフも徐々に増え、現在は細胞検査士2名、臨床検査技師4名、営業1名、事務1名、技術員2名、そして非常勤の病理医9名で日々の業務に対応している。病理医は月・水・金・土に1人ずつの体制で、1回に2日分の診断を行う。

地域密着型のセンターを目指すという初心を貫き、秋田県の施設からの受託を優先している。現在、県内の病理検体の約半数が外注されているといわれ、前述のようにそれらは東京や仙台の検査センターに運ばれ検査・診断がなされていた。戻ってきた結果に対して臨床医が疑問をもち質問しようとしても、数十人単位の病理医を擁する大規模な検査センターでは、それらの疑問に即座に対応することはむずかしいのが実状だった。

しかし、県内の病理医9名が診断を行う当センターでは、診断結果や疾患に対する問い合わせなどに迅速に対応することが可能となった。また、移動距離が短縮されることによ

り、検体受付から報告までの日数も劇的に短縮されている。実際、平均的にかかる日数は生検などの病理組織学検査では4日、手術材料でも1週間以内、細胞診では3日である。検査をオーダーする臨床医からは、見ず知らずの医師に問い合わせるわけではないため気軽に質問ができるし、なにより確実に日数短縮がなされ助かっていると好評だそうだ。

### 独自のシステムを構築し 報告書に写真を貼付

当センターでは、臨床医に病理診断と細胞診断を身近に感じ、さらに診断結果についての理解を深めてもらうため、報告書全例に写真を貼付して返送する。病理検査報告の要ともいえる写真がより鮮明に美しく印刷されるように、印刷用紙もスタッフ間で何種類も吟味したものを使用している。

開設当初、報告書に写真を付けるというアイデアについては積極的ではない意見もあったが、阿部社長は写真付きの報告書をセンターの特

徴にしようと実行した。「言葉では説明しきれないが写真では一目瞭然のことがある。かならずしも病理を理解しているわけで

はない臨床医が、言葉だけの報告書では患者さんに説明する際に困ることが多いと聞く。写真を残すことで我々には責任がついてまわるが、正確な診断結果を報告するという意味では必要だと思う。依頼医の評判も上々だ」と阿部社長は語る。

報告書の記載にあたっては、臨床医にわかりやすいことと同じくらい重要視しているのが、患者さんが読んで分かる報告書を、という姿勢である。一般的に病理医のなかでも報告書の記述は日本語か英語かのコンセンサスがまだまだ得られていないが、当センターは患者さんの視点を第一として、基本的に日本語で、わかりやすい言葉で、をモットーに作成している。先の写真の貼付もそのサービスの一環といえる。

検査依頼報告書は、各施設のさまざまな臨床医の要望に対応するために、当センター独自のシステムを構築した。120に及ぶ施設とのやりとりである。依頼元の検査依頼書や報告書の体裁、カルテも紙だったり電子化されていたりとさまざまであるが、なるべく先方の要求に応えられるよう個別の対応が心がけられている。

報告書については、現在も依頼医の要求に合わせて変更を加えている。電子カルテを導入している施設も増えてきたため、報告書をコンピュータへ直接送信してほしいとい



受付担当の村上 薫さんと営業担当の山本 一さん(写真D)、細胞検査士の太野喜作技師長(写真E)、鏡検用の机はすべて窓側に向いている。天気のよい日には鳥海山が窓越しにみえ、目と心の疲れを癒してくれるという。検査依頼書を確認している加藤千佳主任技師(写真F)。



う要求が今後増えていくことが予想されており、そのような要望が出れば即座に対応できるように準備は進められている。しかし、病理診断は疾患名が記載される決定的な個人情報であり、セキュリティの絶対の保証がなければ実施には慎重にならざるをえない。

## 技師も診断に対する責任を

当センターの技師は、自分の受け持った病理検体に対しては包埋、薄切、染色などの一連の作業はもちろん、それを診断し報告書に貼付する写真を選びコンピュータにアップするという段階まで担当する。その後、診断医である病理医がそれら報告書をチェックする。最終的な診断は病理医が行うが、もし技師の診断が間違っていたり、貼付された写真が不適切であった場合には病理医による指導がなされる。この段階でかならずダブルチェックが行われることになる。技師の知識・理解不足による所見の見逃しもあるが、ディスカッションをするなかでは、病理医が見落としそうになる症例を技師が見つかることもあるという。病理医とコミュニケーションをとりながら各技師が診断を導くこのシステムは、スタッフに責任感とやりがいを与えている。

さらに当センターでは、精度の高い結果報告はセンターの使命との考

えから、月に一度、すべての生検症例について再チェックを担当する病理医もあり、全症例についてトリプルで診断をチェックする体制を基本としている。

当センターの精度管理責任者である南條 博医師は「各スタッフは日々の業務のなかで患者さんのためというのを常に意識して努力しており、精度は確実に向上している。報告書の写真についても、最近では変更の指示を出すことは少なくなった。それぞれが自分の出す診断に責任感をもって対応している」と、スタッフの質が向上していると評価する。

## 手術中迅速診断の実施

由利本荘市では、1病院を除いて術中迅速診断ができる施設がない。そのため、当センターのスタッフが要請のあった病院に出掛けて臓器を受け取り、センター内で標本を作製し迅速診断を行っている。臓器を受け取ってから結果報告までに要する時間は30~40分程度、月に2~3件の要請がある。

また、テレパソロジーへの対応も視野に入れ、依頼側の施設の設備や体制が整えば導入は可能だと阿部社長は考えている。た

だし、術中迅速診断にしてもテレパソロジーにしても、設備や体制の他に標本作製担当者の技術的な問題やセンター側のマンパワーの問題もあるため、まず先方の担当者と信頼関係を作ったうえで、導入に向けた取り組みをする必要があると感じているようだ。

## 情報の交差点

当センターは、臨床検査技師である阿部社長により、患者さんの視点を大切に病理・細胞診断施設として設立されたが、その後ろには、その思いに賛同した県内の病理医の大きなバックアップがあった。それは、秋田県の病理医の半数以上を占める非常勤医が当センターに関わっていることから理解できる。

南條医師は「当センターは県内の病理医の交差点的存在でもある」と語る。さまざまな病理医が当センターに入れ替わり立ち替わり訪れ診断するにあたって、当センターのスタッフと熱いディスカッションを交



左より、組織標本の整理をしている佐々木友美技師と今野篤子技師(写真G)。

阿部社長と大谷雅也技師(写真H)。

組織診断をしている南條医師(写真I)。



標本を染色する大谷技師（写真J）。その日の検体がどの施設からどれだけ受け付けられているかを示すボード（写真K）。



わす、また、当センターのコアとなる病理医は週1回大学医局に集まり症例をチェックする。これらの積み重ねは、実は病理医にとってもメリットをもたらしたというのだ。「現在の病院を取り巻く環境は厳しく、自分のモチベーションをどのようにもっていけばよいのかむずかしい状況といえる。情報が交差する場所があることで、人間関係はもちろん、県内の病理関係者の知識の集積にもつながるのではないかと南條医師は分析している。そして、さまざまな病理医と関わる環境のなかで、検査技師の知識と技術にも磨きがかかっていく。

## 仕事への愛着

日常の業務において標本作製から診断まで任されている当センタース

タッフの採用の際の条件には、「病理検査が好きで、細胞検査士になりたい人」が掲げられている。自らも顕微鏡をみるのが好きでこの世界に入ったという阿部社長は、これまでの経験を当センターでのスタッフ育成に活かし、今後もスタッフと一体となって、地域の患者さんのためにより迅速で確実な結果報告を心がけていきたいと話す。

そしてその思想はスタッフにも着実に伝えられている。日々の業務に追われるだけでなく、それぞれがテーマを決めて勉強し、医師の高いモチベーションに応えられる技師になろうという思いをもち、学会発表や研究にも熱心に取り組んでいる。それは、直接的には個人のレベルアップであるが、当センターの結果に対する信頼を確保することでもあり、最終的には患者さんへ還元されるものである。スタッフはここでの仕事に愛着をもち、向上心をもって知識・技術の習得に努力している。

## 信念と実行力をもって

お話をうかがった阿部社長の口からは何度も「地域の患者さんのため」「地元で密着した施設」という言葉が発せられた。当センターを立ち上げ

るにあたっては、増田教授はじめ南條医師や非常勤をお願いした病理医の信頼と協力を得て、阿部社長の信念を実現化することができたという。

報告書の様式や術中迅速診断に対する取り組みなどの経緯は、常に先々を見越して業務を展開してきたことを彷彿させる。すべての対応についてのユーザーの「ワガママ」すら楽しむ、そんな余裕さえ感じられた。そして、結果に対する責任感とそれを支える技術への自信、その基盤となっている「地域の患者を守る」という使命感が伝わってくる。開設以来の受託検査件数の増加など、確実に秋田県内に受け入れられているといえる。

責任ある仕事というのは決して楽な毎日ではやり遂げられないと阿部社長は語る。しかし、業務への厳しさはもちろんなあるが、張りつめた空気のなかにも感じられるアットホームな雰囲気は、仕事に対する責任とやりがい、相互の信頼関係と尊敬、そして何より当センターでの仕事が好きだというスタッフの思いを伝えてるように思われた。

（文責 編集部）



当センターでは原則的にすべて永久標本として保存している。今後、この部屋も棚と標本でいっぱいになるであろう（写真L）。

秋田病理組織細胞診断研究センター  
〒015-0041 由利本荘市業師堂字  
芝取場 27-1